

# 分科会 14

## アンチスティグマとリカバリー ～精神障害の誤解・偏見の解消を考える～

コーディネーター：寺尾直宏（NPO法人千葉県精神障害者家族会連合会）  
宇田川健（NPO法人地域精神保健福祉機構・コンボ）  
高橋清久（公益財団法人精神・神経科学振興財団）

2日目の午後1時、沖永記念ホールステージ上に出演者5人が並び、シンポジウム形式で分科会が始まった。先ず司会の寺尾が「精神障害の誤解・偏見の解消は遅々として進まないが、リカバリーした障害者の一般企業への就労や街の中での自立生活により障害者が社会に直接接することで解消が進むことに注目し、関係者の発言に期待したい」と分科会の狙いを述べた。

最初に㈱ISF ネットハーモニーの成澤俊輔氏が、障害者など就労困難者を自社の社員として採用し、社内で教育して一般企業へ就労させる活動を紹介した。本人の特性に合った業務に就かせパソコン等の指導もして、戦力になるトレーニングをする。実力が向上したところで多くの提携企業へ障害者枠での雇用を働きかけ、3ヶ月は派遣社員として送り込み、人柄、能力を見てもらい納得の上で正式雇用につなげる。このISF ネットグループは全国で3,300人の社員の内、1,300人がいわゆる就労困難者で500人は障害者手帳を持ち、皆が戦力として働いて次々と一般企業へ就労していくとの話であった。

次に発言したのは、シータス&ゼネラルプレス社の奥村康子さん。宅配食材企業などのカタログ制作支援をする企業で、ISF ネットから受け入れた障害者（5名の内4名は精神障害者）を雇用した経験が話された。会社側も病気について学び配属先には研修をする等の配慮もしたが、長く勤めてもらい誤解・偏見は全く無くなった。

次は千葉県松戸市の不動産会社代表の佐藤博子さん。精神障害者が街で暮らすためのアパート・マンションの部屋を多数斡旋した実績を持つ。精神障害者に貸すにはオーナー・不動産屋の理解が必要、大手は難しいので避けるが、協力的な人は必ずいる。トラブルもあるが福祉担当者やオーナー・不動産屋等が対処に走るので近隣も理解してきている。グループホームを含め、新松戸駅周辺に120から130名程の障害者が支援を受けながら自立生活をしている。

当事者の立場からは、コンボの宇田川健さんにコメントをいただいた。

障害者が職場や地域に出ることで、一般社会の理解を広げるのは大変大事なことです。その場合、障害者の具合があまり良くなくても、本人が一所懸命に生きているところを見てもらうことが、誤解・偏見を無くすポイントなのだと思う。

出演者の発表後、会場からも「地域での見守り、配慮による就労の拡大、内なる偏見の克服、地域への積極的な参加」等大事なキーワードの発言があった。

最後に高橋清久氏の講評があり、「自分の若いころと比べると、職場や地域への進出は隔世の感があるが、アンチスティグマは世界的にも地域の中での草の根運動となっている。リカバリーされた方々の活躍に期待します」と結ばれた。

《寺尾直宏（NPO法人千葉県精神障害者家族会連合会）》